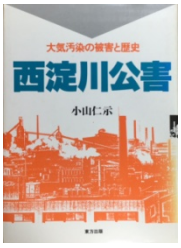
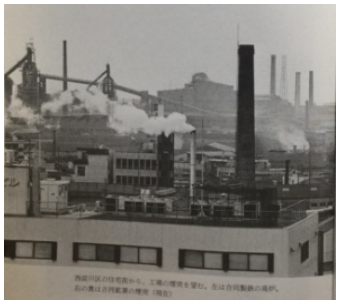
小山仁示『西淀川公害』

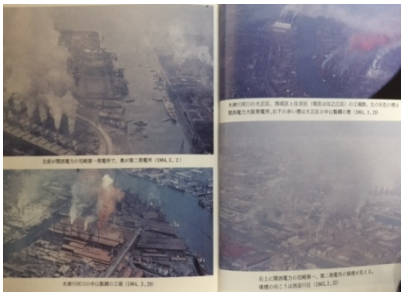


写真は 1988 年に刊行された、西淀川公害の歴史に足もとから迫る書。西淀川のまちを歩いたあと、本書に掲載された多くの写真を眺めた。副題「大気汚染の被害と歴史」のように、西淀川を「歴史散歩」した。

本書冒頭から―1936(昭和 11)発行の『小学国語読本』巻七は、大阪についての記述を「汽車で大阪駅に近づくと、晴れた日でも、空がどんより曇つたやうに見えます」ではじめ、「それも其のはず、大阪は俗に煙の都といはれ、大小八千以上の工場がこゝにあつて、林のやうに立ち並ぶ煙突から、たえず黒い煙をはき出して居るのです。大阪は、実に日本第一の工業都市で、各種の工業がはなはだ盛です」と、「煙の都」をたたえていた（1942 年発行の『初等科国語』四では、工場の数が「大小一万以上」と増えている)。

教科書はついで、「川と掘とは、まるであみの目のやうに組合つている」「水の都」大阪のことを書き、さらに豊臣秀吉と仁徳天皇の事蹟を記していた。この場合、「民のかまどの煙の立つやうになつた」のを喜んだ仁徳天皇の話が、「煙の都」大阪の現状とあわさって、大阪っ子の私たち小学生に深い印象を与えた。「晴れた日でも、空がどんより曇つた」街に住んでいることを、誇らしく思ったものである。大阪が煤煙で苦しめられ、公害都市と化していたことなど、軍国少年に育てあげられていた当時の児童には知らされなかったのであった。





あとがきで「西淀川の公害も訴訟も、自分たちの問題である。それは、自分たちの地域で公害とたたかうということなのである」と。

この言葉に小山仁示先生の思いが込められていると感じた。先生はご自宅近くで計画された高速道路建設の反対運動の中心メンバーであった。じつは私が大阪市大大学院に入学したころ、先生に招かれ、ご自宅を訪ねたことがある。道路公害をあつく語られたことが忘れられない。

小山先生は歴史家として、同じ東方出版から『大阪大空襲』を出版されている。先生の著書から、大阪の歴史や公害の歴史を学んでいきたい。

(2018 年 7 月 26 日)